

学位審査報告書

(ふりがな)	たまい なおひこ
氏名	玉井 尚彦
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 427 号
学位授与の日付	平成20年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
(学位論文題目)	
The Syntax-Semantics Interface of Change-of-State and Change-of-Location Expressions: From a Derivational Viewpoint (状態変化・位置変化表現の統語・意味インターフェイス ―派生的観点から―)	
論文調査委員	主査 教授 大木 充
	副査 教授 山梨 正明
	副査 教授 藤田 耕司

(論文内容の要旨)

本論文では、状態・位置変化を表す V-DP-AP/PP 型構文、特に結果構文・場所格交替構文・使役移動構文について、その統語派生に関わるアスペクト特性に焦点を当てる。とりわけ、動詞の項選択が、各動詞によらず共通の統語的要因からどの程度まで予測可能かを、生成統語論の枠組から考察する。その際、拡散形態論 (Distributed Morphology) に従って、動詞や形容詞を、範疇指定のない語根 (root) とそれを選択する主要部から成る複合体に対応する形態音韻的な具現化とみなす。このように統語と形態の間の同型性を考えることにより、レキシコンに記載される部分を最小限に抑えることができる。この立場から、動詞の下位範疇化に関する性質に対して理論的かつ経験的に妥当な説明を試みる。特に次の3点を主張する。

(I) 結果構文の語順とアスペクト的特性

「動詞-名詞句-形容詞」語順の結果構文 (例: push the door open) と「動詞-形容詞-名詞句」語順の結果構文 (例: push open the door) は、異なる統語派生をもつ。前者の派生では、主題 (Theme) 項が主要部 a_{THEME} の指定部に基底生成する。これに対して後者の派生では、主題項は主要部 a_{ϕ} の投射内に基底生成せず、主要部 v の指定部に直接基底生成する。さらに、「動詞-形容詞-名詞句」語順に含まれる主要部 a_{ϕ} は、イベントの終点から時間的終点への写像に対応するアスペクト素性に関して [-temporal terminus] の指定を受けることが示される。その帰結として、この語順における形容詞が、形態は同じでも一般的な状態形容詞とは異なり、Embick (2004) の分類でいう resultative participle であることが明らかになる。これは resultative participle が例外的に -ed 形態素を欠く、という「形態と意味の不一致」の一例である。以上の主張により、「動詞-形容詞」を複合動詞とみなす語彙的な説明の不備が解決されるのみならず、両方の語順における形容詞のアスペクト的特性が明らかになる。

(II) 場所格交替と使役移動構文の形態統語的性質

場所格交替の locative variant (例: Peter loads paving stones into the lorry. / Pierre charge des pavés dans le camion.) は動詞 put 型構造を、使役移動構文 (例: John sneezed the tissue off the table. / *Jean a éternué le mouchoir de papier de la table.) は小節型構造をとる。このとき、英語では両者とも文法的であるのに対してフランス語では後者は非文法的であるという通言語差は、様態要素が語根として統語派生内に併合 (merge) すると考えることで説明できる。フランス語で使役移動構文が非文法的なのは、音形ゼロの主要部が語根よりも先に統語派生内に併合した上で V-to-T 移動が顕在的に起こる結果、形態論的制約に抵触する構造を作るためである。フランス語で二重目的語構文が非文法的であることについても同様の説明が成立する。このように、動詞の語彙意味的性質とみなされてきたものの一部が形態統語的性質に還元できることが示される。この結果、場所格交替の locative variant を使役移動構文の下位範疇と考えたり、或い

は新たな構文を設定するといったことは不要になり、構文文法的な説明の問題点が解決される。同時に、様態要素に独立した地位を与える形の統語派生をとらないことにより、語彙意味論的な説明の問題点が解決されるのに加えて、統語派生を用いた説明においてもアドホックな操作が不要になる。

(III) 継続相の統語的分析

本来完了を含意するとされる結果構文が、目的語名詞句が有界 (bounded) であるにもかかわらず継続相の副詞句と共に起する場合 (例: paint the wall red for an hour) は、例外とみなすことなく、完了性 (telicity) を機能範疇 Asp の素性照合と捉えることで統一的に説明できる。より具体的には、[-telic]の素性指定を受けた主要部 Asp が *aP* と直接併合する構造をたてることにより、「上位イベントにおける活動 (activity) が進むにつれて、下位イベントに対応する状態変化が進む」という「部分的結果解釈」が得られる。この枠組を採用すると、目的語名詞句が非有界である場合 (例: paint walls red) と、結果述語が変化の終点を表さない場合 (例: hammer the metal nearly flat) と、「動詞-形容詞-名詞句」語順の場合を含めて、結果構文に関する統一的な説明が可能になる。さらに、場所格交替など他の構文にもこの説明は適用することができる。以上のように、複合述語形成などの操作を仮定することなく、上位・下位イベントの二段構造を保持することにより完了性に関する性質が適切に説明される。また、完了性を語用論的に処理するのではなく文法の核の部分に取り込むことを通じて、理論的・経験的両側面から適切な形で文法モデルを単純化することができる。

以上のような統語的な分析方法を用いて動詞にまつわる言語現象に関する考察をより深めることは、文法のメカニズムの解明に貢献するものであり、さらには、ヒト固有の認知機構に関する知見を得るという生物学的な貢献をも同時にもたらすものと考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文では、状態・位置変化を表す V-DP-AP/PP 型構文、特に結果構文・場所格交替構文・使役移動構文を考察の対象にしている。動詞に関する現象を扱う場合、おおよそ三つのアプローチがある。語彙意味論的アプローチ、構文文法的アプローチ、Minimalist 的アプローチである。論者は、Minimalist 的アプローチで前述の構文を考察している。

本論では、まず次の 3 点についてそれぞれ綿密な議論を展開している。(1) 「動詞-名詞句-形容詞」語順の結果構文と「動詞-形容詞-名詞句」語順の結果構文は、異なる統語派生をもつ。(2) 場所格交替の locative variant は動詞 put 型構造を、使役移動構文は小節型構造をとる。(3) 本来完了を含意するとされる結果構文が、目的語名詞句が有界 (bounded) であるにもかかわらず継続相の副詞句と共に起る場合は、完了性 (telicity) を機能範疇 Asp の素性照合と捉えることで統一的に説明できる。

次に、これらの 3 点に関する議論を踏まえて、以下のような主張を行っている。それぞれの主張には十分な説得力がある。

(1) 「動詞-形容詞-名詞句」語順における形容詞は、形態は同じでも一般的な状態形容詞とは異なり、Embick (2004) の分類でいう resultative participle である。これは resultative participle が例外的に -ed 形態素を欠く、という「形態と意味の不一致」の一例である。このように考えると、「動詞-形容詞」を複合動詞とみなす語彙的な説明の不備を解決することができる。

(2) フランス語の使役移動構文では、音形ゼロの主要部が語根よりも先に統語派生内に併合 (merge) した上で V-to-T 移動が顕在的に起こる結果、形態論的制約に抵触する構造となり、非文法的となる。この説明は、フランス語の二重目的語構文の非文法性にも適用可能である。このように考えると、様態要素に独立した地位を与える形の統語派生をとらないことにより、動詞の語彙意味的性質とみなされてきたものの一部が形態統語的性質に還元できる。この結果、語彙意味論的な説明の問題点が解決されるのに加えて、統語派生を用いた説明においてもアドホックな操作が不要になる。

(3) 「上位イベントにおける活動 (activity) が進むにつれて、下位イベントに対応する状態変化が進む」という「部分的結果解釈」は、[-telic]の素性指定を受けた主要部 Asp が *aP* と直接併合する構造から説明される。このように考えると、上位・下位イベントの二段構造を保持することにより完了性に関する性質が適切に説明され、複合述語形成などの操作を仮定することは不要になる。さらに、完了性を文法の核の部分に取り込むことにより、理論的・経験的両側面から文法モデルの単純化が可能になる。

学界に対する寄与として特に次の 3 点が評価できる。

(1) 「交替」とみなされてきた構文とその類似構文を説明する上で、形態上は非顕在的な要素を導入することにより、語彙的な説明を用いずに理論的・経

験的により妥当な説明を与えることに成功している。具体的には、動詞-結果二次述語隣接型 (V-XP-DP) の結果構文における結果二次述語が例外的に -ed 形態素を欠く結果分詞 (resultative participle) であることを明らかにしている。さらに、場所格交替と使役移動構文にみられる通言語差に適切な説明を与えている。

(2) 英語を考察対象の中心としてはいるものの、フランス語との比較対照を通じて、今後さらに広範な通言語的比較へと拡張する見通しを示している。さらに、結果構文を語彙的に捉えることの問題点に関しては、ドイツ語やノルウェー語からの事実も指摘している。加えて、本文では示唆にとどまってはいるものの、通時的比較の可能性も示している。

(3) 結果構文、場所格交替、使役移動構文など、限られた言語現象を議論の対象にしているが、あえて考察対象を絞ることによって分析を深化させており、他の言語現象への応用の可能性、さらには言語と認知の関係について議論を発展させる可能性を示している。

今後の課題として、扱う言語現象を広げることにより、本分析の妥当性を検証する必要がある。その際に、簡潔な説明を目指しつつ実際には複雑な議論になってしまう事態がしばしば見受けられるので、注意を要する。また、交替現象の分析については、認知文法からの知見がどのように関連するかを考慮することも参考になるであろう。認知文法の枠組では、交替現象について事態認知の差を用いた説明が為されている。本分析は異なる枠組を採用しているものの、従来「交替」とみなされてきた現象について異なる構造を考える点では共通点も存在するので、認知文法の知見を参考にして本分析をさらに豊かなものにすることも可能であろう。さらに、本分析で採用している Minimalist 的アプローチには、語彙意味論的アプローチと構文文法的アプローチの両方の知見を融合できる可能性があるので、その可能性にも焦点を当てて議論をすることも有意義であろう。

本論文は、広範な先行研究を考察対象とすることで周到かつ独創的な議論を展開している。環境情報認知論講座の目的に沿った研究であり、今後の言語学及びその関連分野への貢献が期待される。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成20年7月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。